『比較民俗研究』12. 1995／9

書　評

C．ダニエルズ・渡部武編
『雲南の生活と技術』

稲村　務※

1章　西双版納少数民族の村寨を歩く
　　田村善次郎
　民具抄録（Ⅰ）・運搬用具
　　印南敏秀
2章　雲南地方伝統生産工具採訪記
　　渡部武
　民具抄録（Ⅱ）・鍛冶屋
　　渡部武
3章　西双版納の水車
　　C. ダニエルズ
　民具抄録（Ⅲ）・竹の用具
　　印南敏秀
4章　雲南の漁と船　　神野善治
　民具抄録（Ⅳ）・狩猟・漁撈具
　　渡部武
5章　雲南の生活空間と食文化
　　印南敏秀
　民具抄録（Ⅴ）・雲南の編み袋
　　渡部順子
6章　雲南少数民族の民家の伝統と変化
　　李鋭
　民具抄録（Ⅵ）・諸職　　印南敏秀
7章　西双版納山地民族の婚姻習俗と年中行事
　聞き書き　　李暁斌
　民具抄録（Ⅶ）・大理白族の甲馬紙
　　C. ダニエルズ
8章　西双版納地方少数民族の焼畑をめぐって
　　（座談会）

※筑波大学大学院歴史・人類学研究科

11号の新刊紹介で取り上げられた本書は雲南省，特に西双版納傣族自治州を中心にフィールドワークを行い，それを生活と技術，特に民具という点から資料化しようという試みである。中国の研究者との合同調査の形で進められており，焼畑の専門家である尹紹亭を8章の座談会で迎え入れているのが特筆される。論者のほとんどが文化史ないし技術史を専門としており，そういった意味では特殊な視点が期待される。ただ惜しむらくは，編者のダニエルズ以外は雲南省の研究を専門としておらず，やや地域的な専門性は低い。また，中国側のスタッフもやや若すぎるのかあまり専門的なところまで踏み込めていない。

全体に訪問記であり，一次資料の提出に重点が置かれているが，雲南省の民俗学の水準からすると参照すべき論文や本，あるいは歴史資料などを欠いており，ダニエルズを除いてそうした専門性に欠けるのが難点である。西双版納は早くから開放地区に指定されており，文書資料や訪問記，民俗資料などはかなりの量にのぼる。日本でも西双版納を専門とする研究者は複数存在しているし，本書があつかったタイ，ラフ，ハニ，ペーといった民族の専門家は国境を跨いで何人もいる。

1章は西双版納のハニ族，ラフ族，ジノー族，クームー（克木）人の村の訪問記である。評者は西双版納のハニ族の専門なのでハニ族に重点を置くことにしたい。婚姻の事例で論者は西双版納ハニ族の族内婚，村内婚を強調している（P. 26）が，そうしたことはない。西双版納のハニ族は1980年代以前にも漢族，ラフ族などとの婚姻は盛んであったが，タイ族との婚姻がみられるのはたしかに学校教育が進んでからである。また，婚姻の儀礼が必ず糞や土くれ花嫁に投げて村を追い出すということでもわかるように，村外婚を理想としている。私の事例でも村内婚の事例は稀であった。こうしたことは，聞き書きだと理想的なことしか聞けないので実際いくつかの家族を

選んでサンプルをとってみる必要がある。また，論者は交差イトコ婚の婚姻規制を期待しているが，西双版納のハニ族にはリニジ外婚がみられるだけで，一般に交差イトコ婚は禁じられている。しかし，紅河や元陽のハニ族の中には父方交差イトコ婚，母方交差イトコ婚，姉妹交換婚などがみられる。「ピーサァ」という職能者についての言及があるが，筆者の知るかぎりピマあるいはベマの間違いではないだろうか。

2章はハニ，ラフ，ジノー，クームー，ペー等の諸族の生産工具についての記述である。工具についての資料は比較的少なく，日本語で読めるものとしては貴重である。

3章はダニエルズによるタイ族の水車および甘蔗圧搾機についての記述である。ダニエルズはこれまで甘蔗圧搾機についての論文を発表しており，それによると従来山形歯式の圧搾機は西洋起源であるように思われていたが，タイ族のなかでそれがみられることは一種の発見であるそうである。

4章では，大理州ペー族の漁撈が鵜飼を中心に述べられている。船や漁網，筌などの漁具が写真入りで紹介されている。

5章は，ハニ，ラフ，タイ族の食生活と住生活が述べられている。住居空間の研究は北タイが比較的進んでいるので今後比較研究がなされるのを望みたい。食習慣についてはまだ照葉樹林文化論の域をでないところがあり，今後各民族の食習慣の変遷史が明らかにすることが望まれる。ハニ族なども昔から高床の家に住み，もち米を食べていたわけではなく，雲南省が様々なものの起源地と考えられることから少数民族の諸習慣は，文化大革命以前はあたかも変わらなかったかのように記述されるのが通例であり，照葉樹林文化論の限界もその点に見いだされる。

6章は中国人研究者によるタイ，ラフ，ペー，ハニ族の民家の記述である。記述は比較的短いもので，ごく紹介程度にとどまっている。5章同様歴史的な考察が加えられることが望まれる。

7章は中国人研究者によるハニ，ラフ，クームー，ジノーの婚姻習俗と年中行事の記述である。この分野については中国の研究者による民俗学的報告がかなりあり，北タイには比較すべきデータが十分揃っている。そうした意味では，新知見はほとんどない。中国側での報告が聞き書きに終わるのは惜しまれる。

8章は尹紹亭を迎えて，西双版納の焼畑についての座談会である。尹は雲南の焼畑の歴史が二百年くらいしかないなど刺激的な発言をしている論者である。座談会は西双版納の生態系の話と，全体の総括部分になっている。

全体に聞き書きが中心であり，文書資料による検討が進んでいないことが惜しまれる。西双版納，大理はもっとも早くから対外開放が進んだ土地であり，現在は雲南省のほとんどの地域が開放している。もし，聞き書きで先駆的な研究を行なうのであれば，西双版納，大理，麗江などではなく，新しいフィールドを目指すべきである。雲南省の集団調査は継続的に研究する研究者の養成が進まないことからか，一種の「お祭騒ぎ」で研究そのものが持続していかない難点がある。みんなで行って，中国の研究者のお話をうかがって，報告書ができればそれで終わりということが多い。現在は『中国文化人類学文献解題』（末成道男編・東京大学出版会）など目録類も整い，中国の文献を体系的に読むことができるようになっている。中国の研究は引用のシステムが日本や欧米と違って先行研究を無視する傾向がある。そのため，目立つ著作だけみているとすぐに底が見えてしまうが，地元の研究者や好事家が記した新聞記事や地元の雑誌類の記事などを含めると膨大な量の記述がある。こうしたものはかなりの整理を行なわないと使えないが，評者はハニ族に関してはそうした目録を準備している。

照葉樹林文化論などもこうした文書資料の

未整備と非常に限定された調査のもと，樹立された議論であり，もうそろそろ考え直す時期にきているように思われる。照葉樹林文化論の弱い点は，観察資料から一気に日本人のルーツにまで遡ってしまう性急さであり，一般に近代史的視点に欠ける点である。近代といっても，中国の研究者にとっては文化大革命の影響が大きく，大きく「解放前」「解放後」という時代区分をしがちである。問題はそれ以前にもあり，特に民国期，清末の歴史が掘り起こされるべきである。

また，比較ということでいえば雲南省の研究者は中国語プロパーのため，北タイの調査報告を鑑みない傾向がある。同じ民族の研究は北タイでは英語でいくらもでており，もはや民族誌的研究は飽和状態にあるといっても過言ではない。北タイでは十分調査され尽くされている民族が，雲南に入ると謎の民族になってしまうのは実に不思議なことである。また，焼畑の研究についても日本やネパールの例をだす前に北タイの比較研究をされることを望む。

全体を通じて経済の事例が多いことは評価できる。特に生産の合作化から生産責任制への転換期の経済変動が具体的な数字を挙げて詳解されていることは評価できる。統計的な処理ができるほどではないが，評者がフィールド・ワークを行なった1980年代後半ではまだ文化大革命の余韻があり，「経済」という漢語を持ち出すと（地主の経済調査と放逐が行なわれたため）誰もが口をつぐんでしまう有様であったことを考えると，対外開放政策の雰囲気が伝わってくる。

（A４版　463頁　1994年　慶友社）

秋道智彌編著
『イルカとナマコの海人たち』

安室　知※

一見，本書のタイトルからは，統一性のない雑多な論稿の集まりを思い浮かべるが，実際に読んでみると本書を貫く一筋の問題意識があることが理解される。その問題意識がまた本書の最大の面白みでもある。

その問題意識とは，編者である秋道智彌の「熱帯の海で，いまなにがおこっているか」という問い掛けそのものである。

かつて民俗学の研究者はこうした，今起こっていること，現実に住民が直面していることにどれだけ関心を払ってきたであろうか。おそらくそうした現実問題を調査の目的として被調査者に対することはなかったのではなかろうか。民俗学者の関心の多くは過去へ向かう。在るものと信じる民俗伝承の祖型や起源は民俗学者の歴史性に関する奇形的関心事である。我々民俗学者は現実の人を前にしてその人の話を聞きながら，その関心の耳目は現実の人を通り越し過去へ過去へと遡る。

民俗調査のとき，被調査者がそのとき最も関心のあること気に掛かっていることを一生懸命に調査者に伝えようとする場面に出会うことは稀ではなかろう。それは民俗の祖型を追求する調査目的からすれば常に，雑談として聞き流されることであり，できればそんなことは聞きたくない時間の無駄とされてきたことである。表情には出さなくても，そうした話に適当に相槌を打ちながら，なんとか話を本筋（調査者側の意図したこと）に戻したいと考える。そんな経験が少なからず民俗学者にはあるのではなかろうか。

実はそうして無視し捨て去ってきた話の中にも民俗学が対象とすべき問題がかなりあったような気がする。調査時に無駄とされる話

※横須賀市立人文・自然博物館学芸員